

佐々木先輩の霊に捧ぐ

会 長 小 野 哲

佐々木さんと私は同期である。なのになぜ、先輩というか。佐々木さんは操縦士、私は整備士、その差である。グライダーも同じことと思うがパイロットとメカニックの関係は、先輩と後輩である。これには別に不思議はない。海運でも船長は先輩格、機関長は後輩格である。

パイロット佐々木は同期中まれにみる傑出した人物で、これは両牧野先輩も尾田先輩も橋本先輩も並ぶ同志社の誇りである。機上においてパイロットであるからには他事でも世間ではパイロット役に期待するが、現実はそう甘くない。パイロットにしてパイロットの仕事がこなせない迷パイロットもいる。ましてパイロットがパイロット役を恐がるようではどうにもおさまらない。企画外のことは、ことに規格外のことは異常に恐怖をもつ律儀なパイロットが居るとする。多分、異常なまでの責任感が神経を狂わすであろう。補佐する伴侶がクサンチッペだとほとんど悲劇である。典型をネルソンということにすればこの際無難であろう。佐々木先輩は、これら様々なヤっカイから一切無縁の好妙人であった。だから同期の私にとって、全く得難いパイロットであった。佐々木さんは、陸軍の航空母艦から九死に一生を得て帰還したという。私はあの南京から、何事も知らずに翌年帰還した。この差も絶大である。佐々木さんは長い後生を得て、阪神大震災の前に昇天された。私は関東大震災の前に生れていたが、九州大分だからどうもなかった。こんどは西宮の常磐町に前の晩泊まっていなかったのが九死に一生を得た。

佐々木さん、あまり遅くならないうちにそちらに移ります。その折はまたよろしく。

佐々木先輩との出会いと別れ

部 長 坂 口 一 彦

ある日突然「航空部 OB の佐々木です」とお電話を頂戴し、約束の日時に今出川の扶桑館5階の私の研究室へ訪ねてくれました。その時が佐々木先輩との出会いでした。翔友会とか航空部の話など四方山話に一時を過ごしました。特に、翔友会に対する思いと情熱を感じました。別れの際「これから翔友会に顔を出して下さいね」とおっしゃいました。私は次の翔友会総会より出席をさせて頂いています。その日までの私は、航空部の現状などほとんど知識をもっていませんでした。時折機械系学科の学生で部所属の学生より話を聞き、多少は関心を持った時もあったといった状態でした。佐々木先輩のお誘いがなければ多分航空部とは疎遠な状態が続いていたと思います。

初めて出席しました田辺の中心山荘での総会、旧知の先輩の方々にお会いし旧交を温めました。懇親会の前に佐々木先輩より乾杯の発声をとのお話しをお引受けいたしました。私にとってこの日が翔友会および航空部との再会の日となりました。

最後に、私の研究室へ訪ねていらしたのは翔友会長で当時航空部長の小野先生のご退職の前年、私に部長をとの依頼のあった時でした。その後、京都へお越しの節に1、2度研究室へお立寄り下さいました。何時も話題の中心は、翔友会の会員の方々の動向でした。

2年前の新歓コンパの時、宴のお開きの前、ぼつぼつ帰りましょうかとおっしゃって、私を誘って宴会場を後にしました。三条河原町から四条の阪急電車の河原町駅までご一緒いたしました。僅かの時間でありましたが、翔友会のこと最近の学生の気質などお話を伺いました。常々後輩、若い人達の気持を大切に頂き、行動されていたご様子でした。

佐々木さんを偲んで

副会長 政 志 郎

翔友会の幹事長をお引受けいただいて以来、いやそれ以前から会員の動向など終始気にかけていただき、事あるごとにご連絡をいただきました。その時々への対応は、常に先輩のお人柄が滲みでていました。翔友会幹事会の開催にあたり時折、「時間があれば出席して下さい、あまりご無理をされないように」とお電話をいただきました。誠に心のこもったご配慮に只々感謝の念で一ぱいです。

最近の翔友会も年々会員の増加とともに諸規約の制定に向け、情熱を傾けてこられていました。基金の設定など拡大する組織への対応に終始心を配っていた様子でした。現在の大学のクラブは佐々木先輩のような多くの諸先輩方の支えによって維持されているといっても過言ではありません。

佐々木先輩のはぐくんでこられた翔友会も先輩のご意志半ばでのご逝去という大事を迎えましたが、これから次の時代へ向けて一歩踏み出し前進したいものです。最後まで心労をおかけいたしました航空部も部員一同先輩のご期待に沿うよう頑張る所在です。先輩どうぞ安らかに眠りください。ここにつつしんでご冥福をお祈り申し上げます。

“マサはん いつも忙しそやな”と受話器より聞こえてきそうな気がする。

訃報を聞いて半年たった。翔友会が他大学航空部 OB 会より活発で、充実した OB 会活動が継続し得ているのは、佐々木先輩の粉骨碎身の目配り、気配りが OB 会の有志を動かし、有志の知恵と行動が活動の環を大きくして、今の姿になっていると思われる。尾田先輩、牧野(鐵)先輩、諸先輩と共にグライダー野郎として歳と共に翔友会の活性化への執着心が強く、新しい時代に対応できる支援体制とは何か、翔友会への吸引力のパワーアップするにはどんな施策を講ずるべきか、病魔に侵され入退院を繰り返しながらも翔友会への献身的働きをされた。聞くところによると入退院を繰り返していたこの3～4年は、翔友会への思い入れが病魔に打ち勝ち寿命を^{ながら}存えるほど、希望と自分の夢を実現するため事務局方に徹し、凄しい気力で若手幹事を叱咤激励され、その迫力に押され若手幹事が幹事会に提案し、航空部の現役へのアドバイス、又、支援体制を決めていった。

財務的には苦しいながら、現役への心の支援と僅かであるが財政的支援のできる体制を作りあげられた。

人生経験の豊富さと、人のまとめかたのうまさ
が幹事会を動かし、創部60年を目前にして現役、OB が一体となって益々発展するであろう。航空部の夢を実現する運びになりつつある時の訃報であったが、佐々木先輩を偲ぶより、佐々木先輩の夢を実現することが、佐々木先輩の人柄を後世に残す大きな資産と思っている。

我々後輩が、佐々木先輩の意志を実現いたします。(迷うことなく、三途の川を渡って下さい。)

佐々木先輩の御冥福をお祈り申し上げます。

心の青春

幹事長 南村清治

昭和61年11月2日。同志社航空部創部50周年記念式典。

その日は昭和11年12月に尾田、橋本、牧野諸先輩によって発足したわが同志社航空部の永い歴史の中で最も輝かしい一日であった。

全国からこの日ばかりと集った100余名の翔友達、学連、並びに加盟校、大学当局、スポーツユニオン、他クラブの来賓の方々、西独より着いたばかりの純白の「アイオンⅡ」、そして誇らしげな顔の佐々木先輩と同伴された千鶴子夫人……………。

3年前の晩秋、今出川の小野先生の研究室で話しあわれた「50周年」の計画が実行に移り準備委員会が発足した。

佐々木先輩が突如、彗星の如く我々の前に現われたのは確かこの頃だったと思います。

以来59年2月より20数回に及ぶ準備委員会を卓越した計画と指導力、同志社を愛する熱い情熱でご指導されてきました。

OB 会がすでに存在していたとは言え、会員の消息すら把握出来ていない組織の状況からの出発です。

40数年の歳月の空白から翔友300余名の名簿作成という作業は気の遠くなるような忍耐と努力の結集です。

今日の「同志社翔友会」は佐々木先輩のこの熱い情熱でスタートしたと言っても過言ではないでしょう。

そしてそれを土台にして新機体の購入、新格納庫の建設、50年誌の発行、募金活動、そして輝かしい記念祝賀会……………。

さまざまな困難に出あいながらひとつの同志社の旗のもとに佐々木先輩とご一緒できたことを我々は誇りに思います。

いまや同志社翔友会はその規模、その活動状況、どれをとっても過去のOB 会から大きく羽ばたいています。

勿論、これからも航空部の戦力強化、翔友会の組織の充実と拡大、それに伴う運営資金、来たるべき60周年記念事業と将来の70周年への展望等佐々木先輩という「方向舵」を失った翔友会にはむずかしい課題が山積しています。

これからもいろいろな困難に出あうでしょう。やっていかなければならない事が沢山あるでしょう。しかし偉大な先輩が残されたものを我々は大きく育てていかなければなりません。更に発展させていかなければなりません。

これからの我々翔友を佐々木先輩はきっと、大空高くいつまでも変わらぬ青春の心で温かく見守っておられるに違いありません。そう、あの真っ白な積雲の彼方から。

佐々木先輩、心よりご冥福をお祈りいたします。

(昭和45年卒)